

## 色からはじまる造形表現活動

常磐会短期大学 幼児教育科  
教授 平野真紀



### 1. 色と保育の活動

色は子供たちにとって刺激を与える要素でもあります。手に取る場所に色を感じられるものがあると、子供たちは思わず手をのばして触れようとしたり、よく見てみようという気持ちが芽生えたりします。日常の生活や保育場面で、自然に触れる周囲のものから色を意識して自分たちの遊びに取り入れたり、その遊びを継続する中で、子供たち自身が色への意識を広げたりすることもあります。そのような日常生活をもとにした造形表現的な活動による色への意識の向け方も大切ですし、その一方で造形表現活動に主眼を置いて、色から刺激を受けて何らかの行動を生み出したり、何かやってみよう・やってみようと思う意識を高めたりするような活動も同じように大切なのではないかと考えます。

保育者が事前準備のために絵の具を溶いたりしていると、それを見た子供たちは周囲に集まり始めたり、できた色の名前を言ってみたり、できた色を並べてみたりするなど、これからどんな活動が始まるのか興味を持ち始めたりすることがあります。それだけで子供たちにとっては、これから行われる保育への期待を高めるなどの導入やつながりになることもあり、改めて色としての存在性は子供たちにとって、おおいに刺激を与えるものだと感じます。



環境を通して子供の主体性を育てるという乳幼児期の保育の視点を踏まえると、子供たちが自ら行動を起こしたくなる多様なきっかけや起点となる環境を準備することが必要であり、そのような要素として色に注目した活動を折に触れて取り入れることは子供たちの感じる力や、感じたことを感じたままに動き出そうとする力を引き出すことにもつながるのではないかと考えます。

ここでは色をきっかけにした造形表現活動をいくつか挙げて色と造形表現活動について触れていきたいと思います。

### 2. 色をきっかけにした造形表現活動

#### 【色と水】

色水をスポイトで吸い取り、脱脂綿に落として色の染み込みや混ざり具合を楽しんだ活動を皮切りに、それを水の中に入れて改めて色水を作ったりしました。その中で、ペットボトルの上部を切りとって逆さにして漏斗状にした中に何枚かの色付き脱脂綿を入れて、上から水を垂らし入れて色水を抽出したり、

できた色水をいろいろな容器に移したりして遊ぶ子供の姿も見られました。

保育者ができあった色水の容器を色ごとに並べていると、それに触発されたのか、自分のつくった色がどのあたりの色合いなのかを考えながら並べ始める子供たちも現れ始めました。



### 【色をにじませる】

水分が染み込みやすい素材であるコーヒーフィルターやポケットティッシュに色水や水性サインペンを使って、色をにじませる活動です。

色水につけた綿棒や筆をコーヒーフィルターに付けて色をにじませる活動では、思うままに色をのせたり塗ったりする子供もいれば、枚数を重ねるうちに色ののせ方やにじみ具合を確認しながら色の構成





や色の層にも思いをのせる子供たちも出始めました。隣でやっている子供のやり方を見て真似をする子供も、思わぬ色のにじみ方をする事で自分のやり方を見つけ始める場面も見られます。

色のにじませる遊びも素材や描画材料が変われば遊び方も変わります。ポケットティッシュを折りたたまれた状態のまま、水性のサインペンで点をにじませたあと、ティッシュを広げ、その上から霧吹きで水をかける活動では、先ほどの絵の具とコーヒーフィルターによるにじみ遊びとはまた違う色の変化を楽しむ姿が見られました。折りたたまれたティッシュに点で色付けをしたものを広げると、色の点の広がりを目の当たりした子供たちから歓声があがります。色に染み込み方に納得がいかない子供は、もう一度折り目に沿って折りたたんで色を深く染み込ませたり、自分で広げて模様を確かめたことで新たな見通しをもって色を加える様子も見られたりしました。

ティッシュを広げた後、霧吹きで水をかける際には、隣り合った色同士が混ざり合って違う色になったり、水の量の加減や水をかける場所、水をかける方向が異なると色の変化がそれぞれ異なったりすることなどに気づく子供たちもいます。



### 【色を移す・写す】

クレープ紙を小片に切ったものを画用紙の台紙に貼り、その上から筆で水をつけるとクレープ紙から色が染み出してきます。その上に、台紙の画用紙と同じ大きさに切った障子紙を重ねて手で押さえるとクレープ紙から染み出した色が障子紙に移り・写ります。

最初のうちはクレープ紙の小片を重ねないように並べて移す・写す活動が多くみられましたが、次第にクレープ紙の色を重ねることでクレープ紙同士の色が混ざり合うことに気づき始めると、色の選び方や貼る場所や重ね具合に視点を向け始める子供たちも出てきました。色が移り・写りにくいことに気づく子供は筆で水を塗り重ねて、一度写し取った同じ紙を色の配置が同じになるように重ねて試したり、別の障子紙に移し・写して、同じものを何枚もつくったりする遊びを見つけ出す姿もありました。





【色の姿を変える】

シャボン玉液や台所用洗剤に絵の具を加えたものを透明なプラスチックカップに入れ、ストローで息



を吹き入れて色水を泡の球に変化させて遊ぶ活動では、活動が始まった時点ではカップいっぱい泡をためることに夢中になっていましたが、カップから飛び出すぐらいの泡を立てられるようになると、子供たちがやりたいことは、泡が落ちていく様子を楽しむことや紙の上に広がる泡がはじけて色をつけることに移行してきました。

1色目を泡立てて色が付くと違う色を泡立てて色を重ね、紙に付く色の跡を重ねて楽しむ子、1色を使い続けて残る跡を次々と広げていく子もいます。泡の球をいっぱい作りだす子と作った泡をすくうようにして手に取る子との、泡を通してかかわりあう姿も見られました。

### 3. まとめ

色に注目した造形表現活動では子供たちが思わず手を伸ばしてみたい、触れてみたいと思うことから始まり、実際に触れてみると子供の思った通りに、時には思ってもみなかった色の変化によって次の行為や行動を引き起こし、さらに変化を続けていく過程があり、そのことが子供たちの感覚を揺り動かしているのだと考えます。

色を感じ、その感じを身体で受け止め、身をゆだねたり、時には変化させたりしながら自分のやりたいことを十分に楽しむことは、それ以外の保育活動においても、あるいは日常生活においてもいろいろな感じ方や自分なりの気づきを生み出すことにつながっていくのではないのでしょうか。

色と遊ぶ、そんな造形表現活動の意義を、今後も保育の現場で保育者の皆さんや子供たちとともに考えていきたいと思えます。